

櫻井美穂子 (さくらい みほこ)
University of Agder

1. ERCIS (European Research Center for Information Systems) ワークショップ in Kristiansand

前回のノルウェー通信で、ERCIS (ヨーロッパを中心に計 22 国が参加する、情報システム研究に関する大学間ネットワーク) のワークショップが 2016 年夏に私の所属する Agder 大学で開催されるというお話をしましたので、ワークショップの簡単な報告から始めたいと思います。

ワークショップは 8 月下旬の計 2 日間 (ドクトラルコンソーシアムを含め 3 日間) 実施されました。14 国から 41 名が参加しました。内容は学会発表に近く、各大学からそれぞれ現在どのような研究を行っているのかの報告・発表が 2 日間続くというプログラムでした。学会発表と異なるのは、発表内容がアカデミックに rigor なのかどうかというよりも、

今後のコラボレーションの可能性がどの程度あるのか、研究のどの部分に他の大学の研究サポートが必要なのか、という点に焦点が当てられていたことです。背景には、前回ご紹介した、EU が資金を出す大規模研究プロジェクト (EU プロジェクト) が多国籍コンソーシアムをベースにしていること、各大学のリサーチストラテジーとして EU プロジェクトの獲得がプライオリティになっていることが挙げられると思います。夜には懇親会があり、年に一度のネットワーキングの機会をみなさん楽しんでいました。私は初めての参加でしたが各大学の発表は情報システムを軸としながらも多様性に富んでおり、ヨーロッパの情報システム研究の奥深さを実感した 2 日間でした。

2. EU プロジェクトのその後

私が従事する EU プロジェクト (Smart Mature Resilience, 通称 SMR) は、2016 年夏に 3 年間の初年を終え、現在 2 年目に突入し、折り返し地点を過ぎました。このプロジェクトの実施プロセスで非常に感銘を受けたことがありましたのでご紹介したいと思います。

2016 年 9 月、夏休暇を終えたプロジェクトメンバーが Agder 大学に集まり Review meeting なるものが実施されました。EU プロジェクトでは、プロポーザルに記載されたスケジュールに基づき Deliverable と呼ばれる納品物を提出します。私がメインにかかわっているワークパッケージでは、プロジェクト開始から 6 か月ごとに合計 4 点の Deliverable を提出することになっており、当原稿執筆時点ですべての提出が完了しました (すべて一般公開されています)。SMR プロジェクトは 8 つのワークパッケージで構成されており、プロジェクト開始 1 年目で各ワークパッケージから提出された Deliverable



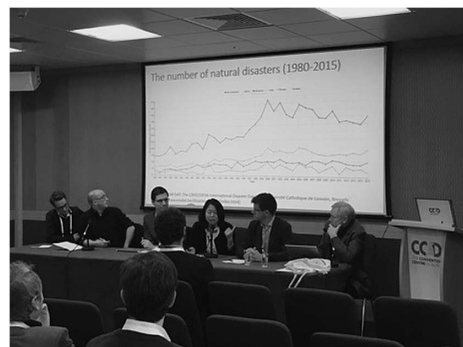
クリスマスには大学のオフィスにクリスマスツリーが登場

は計12点(それぞれ100ページ近い大作です)に及びます。EU Commissionにはプロジェクトごとに担当者(officer)がおり、この担当者が提出されたすべてのDeliverableに目を通しレビューを行い、細かい質問や改善点の指摘などを行うのがこのReview meetingの目的です。レビューの結果必要であればDeliverableはRevisionしなければならず、Revisionがacceptされなければお金がもらえないという非常にシビアなプロセスであり、ミーティングの前、プロジェクトメンバーは非常にピリピリとした空気に包まれていました。実際のミーティングは、各ワークパッケージの進捗報告ののち、EU Commissionの担当オフィサーに加え、2名の外部レビュアー(アカデミックから)が参加し博士論文の公聴会のごとく鋭く厳しい質問を次々に投げかける、というものでした。質問のレベルは非常に高く、大量のDeliverableをいかに読み込まれているかということがわかりました。質問だけではなく、EU Commissionの立場から、今後のプロジェクトの方向性についてのアドバイスもあり、ミーティングの最後にはプロジェクトメンバーと担当オフィサーとの間で、プロジェクトの今後について膝を突き合わせた議論が展開されました。

複数年の研究プロジェクトは日本の科研費でもあると思いますが、役所の担当者が提出物をレビューし、外部レビュアーを交えたミーティングを開催し、必要であれば書類のRevisionを求めるというプロセスはないと認識しています(もし私の認識違いでしたら申し訳ありません)。ミーティングの議論で最も時間を費やしたのは「プロジェクトのアウトカムがいかに現場に還元されるか」という点であり、担当オフィサーのコメントはほぼすべてこの

視点から発せられたものでした。このような資金提供元とプロジェクトメンバーとの深く濃いインタラクションは1年ごとに行われ、2年目が終了する2017年の夏に第二回レビューワークショップがブリュッセルにて行われる予定です。単にお金を出して終わり、ではない、担当者の深いコミットメント(プラス外部の客観評価フレーム)に感銘を受けたのでした。

2回にわたり掲載のノルウェー通信も今回が最後となります。お付き合いいただきありがとうございました。2つの写真は本文とは直接関係がありませんが、ノルウェーでの研究生生活が少し垣間見えれば嬉しいです。



ICIS @ダブリンでSmart City関連のパネルディスカッションに登壇しました。

略歴

櫻井美穂子(さくらい みほこ)

2015年慶應義塾大学大学院博士後期課程修了。博士(政策・メディア)。